



2. カニシュカ舎利容器側面坐仏の一



1. カニシュカ舎利容器蓋上坐仏



4. タキシラ チル・トープB 僧院F
第十八房出土青銅菩薩像



3. タキシラ ジョーリアン僧院
第二十一房出土青銅仏坐像

中国仏像の源流

水野 清一

【要約】 中国の仏像がインドにもとづいてゐることはいふまでもない。それはガンダーラ様式の仏像であった。しかし、一度つたはったら、そのままそれがつづくといふわけのものではない。インドと中国との交は、宗教の宣布、求道といふばかりでなく、経済的にもたえずあつたから、たびたびその影響をかうむつて、その都度ちがつた形式の源流となつた。とともに、両者を通じた共通の傾向をもつたことは、大きく人類史の存在を暗示するものがある。

1

中国の仏像がいつ、どうはじまつたかを論ずるには、どうしても、その源流であるインドとの関係をのべなければならぬ。かつて、わたくしは「中国の仏像のはじまり」といふ文章をかいたが、つひ、このことにはふれなかつた。それは中国の仏像すらわからぬ段階に、なほさらわからぬインドの仏像問題をもちだしては、ことがらを混乱にみちびくとおもつたからである。しかし、いまはちがふ。中国の仏像についていへば、初期の状態は、だいたい異論の

ない程度におちついてゐる。もうインドとの関係をとりあげてもよい時期だとおもふ。もちろん、まだ充分に資料がそろつてゐるといふわけではないが、ひととほりの推測をくはへることは可能である。また、これを機会に大方の叱正をえたいともかんがへてゐる。

さいわひ、『史林』の編者がたくみに督促されるので、パキスタン旅行をまへにした匆々たるさいではあるけれども、とにかく、一気にかくことにした。

① 『仏教芸術』七、大阪一九五〇年刊

中国において最初にあらはれた仏像がどれだとは、なかなかいへないけれども、文献のうちでは桓帝（一四六—一六七）濯龍宮中の浮図（仏）像がもつとも古い。インド、パキスタンでも、クシャン朝カニシユカ王いぜんの仏像はわかつてゐない。カニシユカ王の即位は、マーシヤルによれば一二八年、^①ギルシニマンによれば一四四年、^②まだ定説はなけれども、二世紀のなかごろといふところに、ほぼおちつきつつある。したがって、二世紀のはじめ、あるひは一世紀のおはりに、仏像の開始をおくのが常識である。してみると、カニシユカ王とほぼ同時代の桓帝の仏像といふものは、ずるぶんと古いものだといはなければならぬ。

カニシユカ王時代の仏像は、さいわひ、ペシヤヴァルのシャージーキ・デーリからでたカニシユカ王の舍利容器があつて、よく知られてゐる。^③蓋のうへに一体の坐仏（第一図）胴のまはりに三体の坐仏（第二図）がある。それからべつに同出の独立像（第五図）がある。^④これも銅製の坐仏で、方趺（方形の台座）がついてゐるらしい。この坐仏と蓋上の

坐仏は右手をあげ、左手で衣端をにぎつてゐる。いはば施無畏の印相であるが、その他はまへで手をあはせた禪定形の印相である。両肩をおほふ通肩。衣文はあさいが、衣裳はおもい。頭髮はかんたんに併行直線であらはしてゐる。

カニシユカ時代の仏像は、このほか、カニシユカ王の貨錢にもあらはされてゐる。たつた像とすわつた像とがある。すわつた像には挙手と合手との二種類があるらしい。また方趺のうへにすわつてゐる。立像は右手をあげ、左手で衣端をにぎつてゐるやうである。すんなりしたたちすがたで、まるい頭光のほかに、小判形の挙身光をもつものがある。

濯龍宮の仏像は、これらカニシユカ王の諸像に似たものと想像してよいであらう。

クシャン朝のカニシユカ王は、マウルヤ朝のアシユカ王（前三七ころ）におとらず、仏教の宣布に力あつた王である。その情勢を背景に、中国への伝道もさかんにになり、訳経もはじまり、寺もでき、仏像もつくられるやうになつたのであらう。中国では、いま二つの仏像がつたはつて、この情勢を反映している。

ひとつは四川省梁山県麻浩崖の崖墓の壁に彫りこまれた



6. 四川省梁山県麻店崖浮彫坐仏



5. カニシユカ塔出土青銅坐仏

坐仏（第六図）、他は四川省彭山県の崖墓からでた灰陶の播銭樹座の坐仏である。これらの崖墓が、一般に漢末三国初と推定されるので、仏像も、まづ二〇〇年前後とみてよいであらう。

いづれも右手をあげ、左手で衣端をにぎってあるやうであるが、後者の方はわかりにくい。通肩、刻線のひだ、衣裳はおもい。後者の頭光をもたぬのが気になるが、頭髮は併行直線であらはされ、肉髻がちやんとついてゐる。さういう点からも、たしかにカニシユカ坐仏などとの関係がかんがへられる。

それにしても、表現された趣はいささかちがふ。この方はいたって泥くさく、粗樸で、あちらは体格も成熟し、容姿にも風格がある。

① J. Marshall: *Taxila*. Cambridge 1951, p. 85.

② R. Ghirshman: *Bégram: Recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans* (MDAFA, XII) Le Caire 1946, pp. 99-108.

③ D. B. Spooner: *Excavations at Shah-j-i-ki-Dizari* (ASI, Annual Report for 1908-9) Calcutta 1912.

④ H. Hargreaves: *Excavations at Shah-j-i-ki-Dizari*

二〇〇年前後はクシャン朝の最盛期、仏像の製作も、その頂点に達してゐた。インダス河域のガンダーラ派も、ヤマナ河域のマトゥラ派も、さかんに石像の製作にしたがつてゐた。しかし、中国に将来され、直接、製作の紛本になつたものは、もつと小さい銅像のやうなものだつたらうとおもふ。ところが、さういふものは、かへつてインド、パキスタンにはすくない。からうじてあげられるものはタキシラ出土の二例である。

ひとつはジョーリアン僧院の第二十一房からでたもの①

(第三図)で、合

手の坐仏である。

小さい円光があ

り、顔が大きく

てまるい。もう

ひとつはチル・

トープBの僧院

Fの第十八房よりでた菩薩の坐像(第四図)である。これも大きな、まるい顔、

手に水瓶をもつ

からマイトレヤ

(弥勒)であらう

か。どちらも一

〇センチにたり

ぬ小像である。

僧房内の発掘だ

といふから、僧侶の念持仏であつたかとおもふ。発掘者マーシャルによると五世紀の製作といふ。なるほど、カニシユカの諸仏にくらべると、はるかに手ぎわがよく、表現がこまやかである。

五世紀にもなると、この種の坐仏は、基壇その他に列像として、石ヤストッコで無数につくられてゐる。しかし、



7. 嬰鳳鏡の坐仏



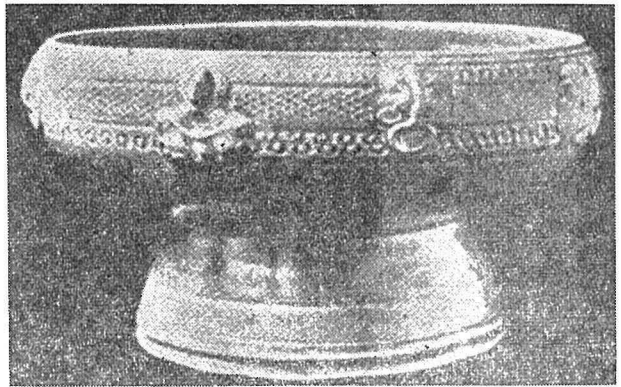
8. 神獸鏡の坐仏

多量生産の小像であるためか、それらのあひだを区別する形式上の差違はいたってすくない。時代の前後を判定することは、まことにむづかしいのである。

中央アジアでも、この種の小像はまみられるが、中国でも五世紀までは、よく似た形式の小像がおこなはれてゐた。そのうち三世紀にさかのぼる例として、つぎの数種がかぞへられる。たとへば夔鳳鏡にあらはされた坐像（七図）および三角縁神獸鏡にあらはされた坐像（第八図）である。それらはみな禪定合手の坐仏である。肉髻をもち、円光をいただき、蓮座をもつてゐる。漢鏡の編年からいって、三世紀の作とおもはれる。

また、古越磁にあらはされた坐仏（第九図）もある。合手形で、肉髻があり、併行線の衣文をもつ。円光があり、しかも蓮座がある。古越磁の年代は三世紀から五、六世紀におよぶが、この九巖罍の例は三、四世紀、ことに神亭とよばれる裝飾壺は、たしかに呉の永安三年（二六〇）の文字をもつものがある。

これらが、さきの四川省の坐像などよりあたらしいものかどうか。なほ確信をもてないけれども、崖墓、瓦俑の年



9. 古越磁の坐仏

説法仏の形式が、いつからはじまったのかあきらかでないが、後出の形式であることだけはうたがへない。例のカニシュカ大塔の基壇でも、蓮座の坐仏ストックがならんでゐる部分は、あきらかに後代の重修で、けつして当初のしろものではない。⑤。ガンダーラでも、マトゥラでも、古いとこ

代観、鏡鑑、越磁の年代観からすると、若干おくれてゐるやうにおもへる。それにもうひとつかんがへられることは、蓮座である。ガンダーラ、マトゥラでは、蓮座は特殊な説法仏においてのみあらはれる。この特殊な



10. 三原出土金銅菩薩像

ればならない。また河北石家
 荘出土の青銅小像には青銅の
 傘蓋をともなつてゐた。②こ
 れは桓帝の仏像に華蓋をまうけ
 たやうに、青銅で傘蓋をつく
 ったのである。中国の仏像で
 は、同質の材料による傘蓋を
 ともなつたものは一般にみな
 い。これはむしろガンダーラ
 の伝統をつたへるものとおも
 はれる。

ろは方趺（方形基壇）、あるひは獅子座である。

4

これに反し、コータンなどの中央アジアでは、若干時代
 もくだるのであるが、すべての坐仏は、みな蓮座乃至蓮華
 と結合してゐる。あるひは、さういふところから、直接に
 中国へはこばれたのかも知れない。

- ① J. Marshall: *ibid.*, pp. 606.
- ② J. Marshall: *ibid.*, p. 606.
- ③ Hargreaves: *ibid.*, p. 26.

この三世紀にあらはれたガンダーラ式の仏坐像は、しだ
 いに定型化し、中国化した。さうして四世紀から五世紀初
 頭におこなはれた、いはゆる古式仏の坐像をのこしたわけ
 である。これは階段式の衣文になり、面貌もかはつてゐる。
 だが、これにはかならず左右に獅子をそなへた獅子座をも
 ちひてゐる。ガンダーラの伝統が、なほつよいといはなけ

東京芸術大学には、この形式の坐仏で、左右の獅子とともに大きな光背をもち、その光背に浮彫の飛天をとりつけたものがある。それはアフガニスタンのショトラクから出る石仏によく似ている。^②ショトラク像と特別の関係があるのかも知れない。

なおこのとき、ガンダーラの菩薩像を、もつとも忠実にうつしたものととして、陝西省三原県出土の金銅菩薩像（第一〇図）があげられる。これは蓮実のうへにたつた菩薩像である。左手に水瓶をもつてゐるので、ふつう弥勒といはれるが、はたして弥勒かどうかは決定できない。豊富な璎珞をつけ、重厚な衣裳をまとひ、サンダルをはいたすがたは、まったくガンダーラ像である。さうかといつて、これをガンダーラの、いまつたはる石像などにくらべてみると、かなりちがふところもある。もつともよく似たのはカラチ国立博物館にある菩薩像^③であるが、これもサンダルの点で、また衣文の点で、また面貌の点で、けつしておなじとはいへないのである。金銅像の面貌は、それだけで中央アジア的といはれるほどの円顔である。衣文はガンダークにもとづきながら、そのさばきにあいまいなところがある。サン

ダルも、ガンダーラのものほど、中央の緒がながくない。要するに、中央アジアをへつたはつたガンダーラ様といふことである。

さうして、この伝統は、北魏太平真君四年（四四三）の金銅立像を^④はじめとして、雲岡様式の諸尊像に脈々としてつたはつてゐる。中国できたといふことは、かならずしも断定できないが、かういふ伝統の存在をおもへば、中国製と解した方がより適切かとおもふ。中国製だとすれば三〇〇年前後の年代が妥当であらう。クシャン王朝が衰退期にはいり、ガンダーラの造像も、やうやく変化しつつあるとまでである。

① 水野『中国の彫刻』東京一九六〇年刊、図版九一

② 「石家庄市北宋村清理了兩座漢墓」『文物』一九五九（一）北京一九五九年表紙裏

③ J. Meunier: *Shotorak* (MIDAF.A. X) Paris 1942, Pls. 10, 11.

④ H. Ingholt: *Gandharan Art in Pakistan*. New York 1957, No. 290.

⑤ 水野清一、同書、図版九四

四世紀、五世紀における敦煌、雲岡の諸像では、もはや、はっきりとした中国様式が確立してゐる。仏教伝来いらい三百年の歴史に培れたものである。さうして、その基本になつた形式は、いふまでもなく、ガンダーラの仏像である。釈迦、弥勒、本生、仏伝を主とした造像で、立像、坐像のほかに交脚像もある。衣文、璎珞、宝冠の形式にも、ガンダーラ像からの伝統がたもたれてゐる。

インダス河の西では、四、五世紀にも、まだガンダーラ様式がひきつづきおこなはれ



12. 雲岡第十八洞仏立像



11. グプタ仏立像

てゐた。法頭（四〇〥四一六）や宋雲（五一八一五二二）は、そのガンダーラ、そのスワトを旅行したのである。ところが、ヤムナ、ガンジスの流域には、三二〇年からグプタ朝がはじまり、グプタ様式とよばれる薄衣の仏像がおこなはれてゐた。そのグプタ様式（第一二図）がいつから中国にはいつたか。それはよくわからないけれども、雲岡様式に若干の影響をあたへたことは、かつて松本文三郎先生がとかれたごとくである。五世紀、とくに太安以後（四五五―）の北魏像（第一二図）にみられる薄衣がそれである。曹衣出水といはれるやうに、身体にびったり密着したうすい衣文である。螺髪も、また、このころからの仏像にあらはれてくる。

雲岡様式から龍門様式への展開は、まったく中国化、いな、漢代への復帰であつた。漢族といふ立場にたてばナシヨナリズムの時代である。それから齊周様式への展開となると、また、その反動といへようか。エキゾティシズムの追求とともに、人体の写実に注意がむけられる。漢族精神からの解放といへないことはない。さうして丸味のある人体の表現が、急速に進展するのであるが、それにはやは

りインドのグプタ彫刻が意識されてゐるとおもふ。もちろん、中国の龍門様式から齊周様式への展開は、中国独自の欲求によつたものであらう。そのことは、けつしてうたがふものではないが、しかし、それにもかかはらず、ひじやうに密接した關係にあつたグプタ像が、その動向に關与したといふことも推察すべきだとおもふ。齊周期の肉つきゆたかな造像には、往々頸の三道があらはされてゐる。三道はあきらかにグプタ像の発明で、肉体のやはらかさを表現しようとした一工夫である。ここではゆたかな、しかもやはらかい肉体といふことが意識にのぼつてゐる。隋、初唐から流行する腰をひねつた菩薩像をもあはせかかんがへるべきであらう。しなやかな姿態のかずかずは、グプタ像のなかに、いくらでもみいだされるものである。

もうひとつ、齊周期の仏像でかかんがえられるのは、その頭光の豪華な裝飾（第一三図）である。同心円、唐草文があり、その唐草文の豊饒さは、グプタ仏の頭光を想起せしめるに充分である。おそらく、齊周の彫刻家は、グプタ像の豪華な頭光を脳裏にうかべてゐたこととおもはれる。

それから齊周期のおはりになると、薄衣がびったり身に



14. 北斉薄衣仏立像



13. 北斉菩薩坐像

ついて衣文をしめさない像（第一四図）もあらはれた。これは、かならずしも普遍的なものではない。一部分にみられるにすぎないが、しかし、あきらかにグプタ像からでたものである。それは隋代を通じ、初唐永徽年間（六五〇—六五五）までは確実につづいてゐる（第五図）。

6

唐代の様式は、よく知られてゐるやうに豊満型である。豊満型であるとともに柔軟型である。隋代の姿態は一時硬直したが、唐代になると、また柔軟さをとりもどした。のみならず、ますます人体の写実に忠実になつてきた。これは、だれしも知つてゐることである。それがグプタ像の豊満さ、柔軟さとどこまで関係があるのか、ないのか。はっきりしたことはないが、しかし、グプタ様式の仏菩薩像が、たへざる接触のうち、漸次、中国人を感化したものとする方が自然である。もとより中国の美術は、齊周



15. 龍門唐永徽年間仏倚坐像

様式から隋をへて、唐

様式へ独自の展開をしたのであるが、それにしても、外部からインドの影響が大いにあったことを否

窟では、ややおくれて盛唐の擂鼓台諸洞の宝冠坐仏としてあらはれてゐる。

中国の唐様式と、インド、パキスタンのグプタ、乃至ペーラ様式とのあひだに、根本的なちがひのあることは、事実である。それにもかかはらず、仏教芸術の動向としては、また共通なもののあることもみのがしがたいであらう。

柔軟な姿態が、とくに顕著にみられるのは、山西省天龍山石窟の盛唐諸像である。ここでは人体の豊満、柔軟よりすすんで、いちじるしく官能的になつてゐる。その菩薩像には、もとよりインドほどのしなやかさ、官能性はない。けれども、中国の菩薩像としては、かつてみないし、また唐代でもほかではみないほどのものであることは、とくに注意されてよからう。

定する必要はない。およそ、歴史の発展には、さまざまの可能性を包蔵してゐる。自主的、独自の展開といつても、外的な感化を排除するものではない。とくにこの時代は、中国とインドとの交渉が密接であり、玄奘をはじめ、王玄策、義浄などがインドの仏教美術を多量に将来したし、その他の僧侶たちも、さまざまの仏教文化を紹介したのである。マガタ国金剛宝座の宝冠弥勒様は、貞観二十二年（六四八）帰朝の王玄策によつてもたらされたが、龍門石

さうして、中晩唐から五代、宋にいたると、それが人間的、世俗的なうつくしさを増大してくる。観音像は女性化する。それはインド、パキスタンにおけるペーラ期、つまり仏教の末期、ヒンドゥ教の勃興期である。その趣味傾向に、また共通のものがみいだされる。事実、歴史上の交流関係があつたかどうかは、よく研究されてゐないが、九、



16. 天龍山菩薩像

十世紀における仏教やヒンドゥ教の像には、唐代の造像によく似たものがある。たとへば、時代は多少あいまいであるが、スワトのシャコレの浮彫摩崖仏坐像や、またヒンドゥの白石ドゥルガ像は、ときに唐末、宋代の造像とまちがふほど、近似したところがある。

式への発展には、ガンダーラからグプタ、パーラ様式への展開と、大ざっぱな併行関係があることもみとめられる。それは大きくいへば人類史の必然的な流れであったとともに、また多分にそれを刺戟した歴史上の交流があったのである。

このやうにみえてくると、中国の仏教芸術、とくに仏像彫刻にたいしては、たえずインドからの影響があつたことが

7

わかる。なにしろ、仏教そのものがインドに根源するのであるから、中国の仏教徒が、インドに多大の関心をよせ、あらゆるものを、そこから摂取しようとしたことは当然であらう。仏像彫刻も例外ではない。けれども、それにもかかはらず、中国は中国として独自の仏教をうみだしたごとく、独自の仏教芸術を発展させたのである。しかも、独自の展開でありながら、その原始的なガンダーラ様式から、成熟した唐宋様式へ

the first areas of Iran to be developed.

In ancient times Rey, the capital of the Seljuq Turks, flourished at the center of this area. But as a result of the invasion of Mongol armies, the capital at Rey was abandoned and Tehran developed until the Safavi Dynasty built a fortified wall around it. It was later made the capital of the Qajar Dynasty and because of the expansion of the city area the old Safavi wall was done away with and a new fortified wall built on an octagonal plan after the model of the wall of Paris.

The development of Tehran as a modern city, however, is the result of modernization during the reign of the present Shah, Reza of the Pahlavi Dynasty. Tehran is now second only to Cairo among the large cities of the Middle East with a population of about 1,600,000. It is a relatively nonproductive city indulging in typical consumption patterns. One cannot see any satellite cities developing around it, and the disparity between city and surroundings is conspicuous. Even within the city, reflecting the social structure, there is a vivid contrast between modern thoroughfares and streets of slums untouched by modernization.

The Origins of Chinese Buddhist Statuary

by

Seiichi Mizuno

It is well known that Chinese Buddhist statuary had its origins in India. Chinese images were of the Gandhara style. But though this style was transmitted to China, it was not to continue in its original form. Relations between India and China did not consist of religious missions and pilgrimages alone, but also included frequent economic exchange, with its influence acting, on occasion, as a source of changing forms of imagery. The fact that through such relations between the two countries certain tendencies were shared between them is indicative of the existence of a genuine history of the human race.